

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



16

よろこびの知らせ
第16集

目 次

信仰のコイノニア	1
使徒 4:32-37	
食卓の奉仕	10
使徒 6:1-7	
導く人がなければ	19
使徒 8:26-31	
目からうろこ	28
使徒 9:10-19a	

ここに収められたメッセージは、2020年1～2月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

信仰のコイノニア

使徒 4:32-37

4:32 信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。

4:33 使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みとそのすべての者の上にあった。

4:34 彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、

4:35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである。

4:36 キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ（訳すと、慰めの子）と呼ばれていたヨセフも、

4:37 畑を持っていたので、それを売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

教会では、一般にはあまり使わない言葉が使われたり、一般とは違った意味で使われたりします。その一つが「交わり」という言葉です。これは英語で“fellowship”と訳されるので、日本語で「交際」とか「お付き合い」という意味だと考えられてきますが、聖書では、それ以上の意味を持つ言葉として使われています。ギリシャ語では「コイノニア」（κοινωνία）と言い、新約聖書の17箇所にも19回出てきます。最初は使徒2:42です。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」とあります。「堅く守り」とある言葉は、「使徒たちの教え」だけでなく「交わり」にも、「パン裂き」（聖餐）にも、「祈り」にもかかる言葉です。初代教会は、「使徒たちの教

え」や「パン裂き」、「祈り」とともに「交わり」を何よりも大切なものとしていました。きょうは、「交わり」について、この箇所だけでなく、聖書の他の箇所からも広く学んでおきたいと思います。

一、分かち合い

「交わり」には、同じものを一緒に持つ、「共有」という意味があり、それは、まずは、目に見えるものを共有することを意味しました。使徒 2:44-45 に「信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた」とあります。きょうの箇所にも「信じた者の群れは、心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた」（32 節）「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておののに分け与えられたからである」（34-35 節）とあります。

こうした大規模な救済制度は、エルサレムで教会がはじまった初期のころだけしか行われず、使徒たちがエルサレムから追放された後は規模が縮小されましたが、お互いが、自分の持っているものを分かち合って助け合うことは、エルサレムだけでなく、各地の教会でも行われました。教会には「やもめの名簿」があり、彼女たちを援助する制度がありました。また、奴隷の身分の人が、自分自身を買い戻し、自由人になるのを援助する基金があったことも知られています。そして、そうした基金に

献金したり、物を分け与えることが「交わり」（コイノニア）と呼ばれたのです（コリント第二 8:4、9:13、ヘブル 13:16）。宣教のための献金もまた「福音の交わり」と呼ばれました（ピリピ 1:5）。

今日では、福祉の働きは、行政が予算を使って行っていますが、それですべてがカバーできるわけではありません。それで、様々な団体が、行政がカバーできない必要に応えようと働いています。しかし、多くの場合、私たちに必要なのは、行政に援助を申し込んだり、慈善団体をお願いしたりするまでもないような小さな援助であることが多いのです。教会の「交わり」はそうした助け合いを提供してくれます。私も、ひとりでは動かせない家具を動かしたり、簡単な修理をしたり、子どもの送り迎えなどをしたり、また、してもらったりしてきました。そのたびに、神がクリスチャンの間に与えてくださった「交わり」を感謝しました。金銭や品物だけでなく、自分が持っている技能や、ほんの僅かな時間を分け与えることで教会の「交わり」に加わることができるのです。そんな意味では、誰もが、何かの形で、この「交わり」に参加することができます。神は、私たちすべてにこの「交わり」の恵みを体験するよう願っておられます。

二、信仰の交わり

「交わり」は、次に、「信仰の共有」を意味します。同じ信仰を持つ者たちが、その信仰に基づいて、互いに励まし合い、祈り合い、ともに礼拝と奉仕をささげることがを指します。よく、礼拝が終わってから、「さあ、交

わりの時間がありますから、皆さん、残ってください」と言われることがあります。一緒に食事をしたり、おしゃべりしたり、アトラクションを楽しむことを「交わり」と呼ぶのですが、それなら、礼拝が終わったらすぐ帰らなければならない人は、どんな「交わり」にもあずかれないのでしょうか。そうではありません。礼拝そのものが信仰の交わりです。礼拝に来る人はみな、共に礼拝をささげることによって、信仰の交わりにあずかっているのです。

また、共に祈ること、互いに祈り合うことも信仰の「交わり」です。パウロは手紙の中で何度も「私のために…祈ってください」と書いています（ローマ 15:30、エペソ 6:19）。パウロは、他の人のためには祈ってあげても、自分のことは祈ってもらわなくてよいなどと考える人ではありませんでした。彼は、使徒という重い責任を果たすのに、どんなに他の人々の祈りが必要かをよく知っていました。

私たちもまた、他の人々の祈りを必要としています。誰にも祈ってもらわなくてよい人など、どこにもいません。ラテン語で “Ora pro nobis” という祈りの言葉があります。「我らのため祈りたまえ」という意味です。主イエスは私たちのためにとりなし、祈ってくださいます。このイエスに「祈ってください」と願い、他のクリスチャンにも祈りを願うことは、それ自体が祈りとなるのです。私は、自分ひとりで自分のために祈ったときよりも、他の人にも祈りをお願いしたときのほうが、より

早く神に聞いていただけたという経験がありますが、皆さんはどうでしょうか。

また、私たちは、人々の祈りとともに、人々の励ましも必要としています。人は誰も、他の人からの励ましを必要としています。信仰者はなおのことです。信仰とは、目に見えないもの、まだ見ていないことを確信することです。たとえ、そこに混乱しか見えなくても、そこにも神がおられ、すべてを治めておられることを確認することが「信仰」です。苦しいことやつらいことばかりが続く中で、この苦しみの後にはかならず幸いがやってくることを信じて待ち望むこと、それが「信仰」です。しかし、私たちはどうしても、今、見えるものに心が奪われてしまい「信仰」を失くしてしまいがちです。だからこそ、互いに信仰を励ましあう「交わり」が必要なのです。私たちの信仰の生涯は神の国を目指す巡礼の旅にたとえられます。まだ見ぬ神の国を信じて、この世を旅するのですが、もし、ひとりでその道を歩かなければならないとしたら、誰も神の国に到達できないでしょう。私たちは、同じ神の国を目指す巡礼団の一員となって、互いに信仰を励まし合ことによって、はじめてそこに到達できるのです。それが教会の交わり、信仰の交わりです。

パウロは、ローマのクリスチャンに宛てた手紙に、「あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです」（ローマ1:12）と書いています。いつかローマに行き、ローマのクリスチャンと会い、互いに信仰を励まし合いたいと心か

ら願っていました。他の信仰者と一緒について、礼拝を献げ、祈り合い、励まし合うこと、それは私たちにとっても切実な願いです。しかし、今は、「ステイ・ホーム」や「ソーシャル・ディスタンス」のため、それができません。「交わり」が制限されてはじめて、私たちは、礼拝に集まり、互いに祈り、励まし合うことがとんなに大切なことかを改めて知るようになりました。それをもっと大切にすべきだったと反省するようになりました。これから、心配なく一緒に集まることができるようになった時には、その機会を無駄にせず、信仰の交わりのために活用し、互いの「交わり」をより豊かなものにしたいと思います。

三、キリストとの合一

さて、「交わり」は第三に、「キリストとの交わり」を意味します。コリント第一 1:9 にこうあります。「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」「キリストとの交わり」、それはいったいどういうことでしょうか。

聖書は、キリストを信じた者は、キリストと一つになり、キリストとともに十字架で死に、キリストとともに復活することによって救われたと教えています。エペソ 2:4-6 にこう書かれています。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちがキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みに

よるのです。——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」イエスが十字架で死に、復活されたのは、今から二千年前のことです。どうして、今、生きている私たちがイエスとともに死に、イエスとともに復活したと言えるのでしょうか。時間や空間の中にいる私たちには、とうてい考えられないことです。しかし、時間や空間を超えて存在しておられる神にとっては、不思議なことでも何でもないのです。私たちには自分で自分を救う力がありません。そんな私たちを、神はキリストと一つに結びつけ、キリストを通して、私たちを見てくださるのです。自分の罪のために何の償いも出来ない私たちをキリストを通して罪の償いを成し遂げたとみなしてくださったのです。罪の中に死んでいた私たちを、キリストと一つにすることによって、キリストと一緒に、復活の力で生かしてくださったのです。神は、私たちをキリストと一つにすること、つまり、「キリストとの交わり」によって救ってくださいました。

このように、キリストと一つにされることによって、救われたのなら、救われてからの信仰の歩みもまた、キリストに結ばれてこそ、はじめて可能になるのです。「キリストとの交わり」に入れられた私たちは、「キリストとの交わり」にとどまっただけでこそ、キリストによって与えられた復活の命を体験することができるようになるのです。

イエスはそのことを、「わたしはぶどうの木で、あな

たがたは枝です」(ヨハネ 15:5)という言葉で、教えておられます。ぶどうの木とぶどうの枝とは一体のもので、ぶどうの枝は、ぶどうの木から養分を受けて、実を結びます。枝は自分の力で実を結ぶではありません。ぶどうの木が枝に実を結ばせるのです。同じように、キリストにつながる者には、自分の力以上の、キリストの力が働き、神のために実を結ぶ人生を送ることができるようになるのです。

私たちが実を結ぶための秘訣はただ一つ、ぶどうの木であるキリストから離れないでいること、「キリストとの交わり」ととどまっていることです。イエスは「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません」(ヨハネ 15:4)と言っておられる通りです。「とどまりなさい」ということは、キリストを信じる者がすでにキリストとつながっていることを意味しています。しかも、私たちがキリストにつなげてくださったのは、神です。私たちのほうからその結びつきを断ち切らない限り、神は、私たちがキリストから断ち切ることはなさいません。「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられ」た(コリント第一 1:9)、「あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちがキリ

ストとともに生かし」てくださった（エペソ 2:4）と御言葉にある通りです。真実な神、あわれみ豊かな神、愛の神が、私たちがキリストと結びつけてくださったのです。これほどに確かで、安心なことはありません。私たちは、キリストから離れては実を結ぶことができないことを自覚する謙虚な思い、何事においてもキリストに信頼する信仰があれば、それによってキリストとの交わりを保ち、その交わりを深めることができます。

この「キリストとの交わり」から互いに信仰を励まし合う「交わり」や「分かち合い」が生まれてきます。また、そうした信仰の「交わり」や「分かち合い」が、私たちの「キリストとの交わり」を育ててくれます。毎週の礼拝で、「キリストの恵み、父の愛、聖霊の交わり」という言葉で祝福を受けるたびに、聖霊がくださる「キリストとの交わり」、「互いの交わり」、そして「分かち合いの交わり」が深められ、豊かになり、成長することを願い求めていきましょう。

（祈り）

父なる神さま、きょう、聖書が教える「交わり」について、誤解していたことや、見落としていたことを、いくつか学びました。「交わり」について、まだまだ知るべきことがあります。それを実践と体験の中で学び続け、ひとつひとつを身に着けていくことができるよう、助け、導いてください。イエス・キリストのお名前です。祈ります。

食卓の奉仕

使徒 6:1-7

6:1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。

6:2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことはあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。

6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。

6:4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」

6:5 この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、

6:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。

6:7 こうして神のことは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。

一、問題

エルサレムではじまった教会では、強制されてではなく、自由に献げたもので、貧しい人たちを支えていました。エルサレムでは、信仰を持った人々が会堂から追放され、貧しくなった人が大勢出たからでした。ユダヤの指導者たちは、以前から「イエスをキリストであると告

白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた」のですが（ヨハネ 9:22）、それが実際に行われたのです。ユダヤの人々にとって会堂から追放されることは、市民権を失うようなもので、物の売り買いが妨げられたり、仕事を奪われたりしました。それで、教会は、信仰のゆえに貧しくなった人々、とくに、やもめたちを援助しました。

ところが、そのことで、教会内に問題が起きました。当時エルサレムには、外国生まれのユダヤ人が大勢いました。その人たちはギリシャ語は話せても、ヘブライ語が話せませんでしたので、何かと不利なことがありました。その人たちから、ヘブライ語を使うユダヤ人に対して、自分たちのやもめへの食べ物の配給が滞っているという苦情や不満が出たのです。使徒4章には「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった」（使徒 4:34）とあったのに、6章では、日々の配給が届かない人たちが起こるようになったと書かれています。

どうしてそうなったかという、**「弟子たちがふえるにつれて」**とあるように、教会のメンバーが増え、それに従ってやもめたちの数も増え、日々の配給が十分にいきわたらなくなったのです。ここでの問題は、「弟子たちがふえる」という、うれしいことから起こった問題でした。人が増えることによって問題が起こるとするのは、いろんところで、よくあることで、教会が成長して、サンデー・スクールの教室や教師が足らなくなって困っているなどということはよく聞くことです。

しかし、使徒たちがこの問題の解決に乗り出したの

は、これが教会の成長に伴う痛みだけのことではなく、「ギリシャ語を使う人たち」と「ヘブライ語を使う人たち」との関係に問題があったからでした。それが「食べ物」のことであったとしても一方のグループが、もう一方のグループに対して、「自分たちは公平に扱われていない」と、不満を感じ、信頼をなくしてしまうなら、それは教会の一致にとって大きな問題となります。もし、「ヘブライ語を使う人たち」が自分たちのやもめだけに良くして、一方をないがしろにしていたとしたら、それは正されなければいけません。また、「ギリシャ語を使う人たち」が、間違っただけの被害者意識を持っていたとしたら、そうした誤解を解決しておく必要があります。ここでの問題は、「食べ物」のことや「マネジメント」の問題だけではなく、教会のふたつのグループの一致の問題でもあったのです。

表面に出てくる問題の背後には、必ず人間の問題があります。個人と個人であれ、グループとグループであれ、人間の感情がそこに絡んでいます。多くの場合、人々は、事実がどうであるかというよりも、その人が好きであるか、嫌いであるかによって、その人の味方になったり、敵になったりします。人間から感情を取り去ったら人間ではなくなりますし、人を動かすものは、多くの場合、真理への愛、不正に対する怒り、また、困っている人への同情などの感情的な働きですから、感情を抑え込んだら、人は死んだも同然になります。しかし、感情だけで行動すると、しばしば危険なことが起こります。信仰者は、感情を抑え込むのではなく、自分の

感情に、神の願い、キリストの心、そして、聖霊の思いを迎え入れるのです。知性も、意志も、感情もともに用いて、問題の解決にあたるのです。問題に取り組むときには、まず祈り、神の前に出て、感情を含め、自分の思いを整えていただく必要があります。

二、解決

さて、使徒たちは全員を呼び集めて言いました。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。」（2節）この箇所は、教会での二種類の奉仕、御言葉にかかわる奉仕と、管理や福祉などにかかわる奉仕のことを言っており、それは伝統的に「御言葉の奉仕」（Service of the Word）と「食卓の奉仕」（Service of the Table）と呼ばれるようになりました。「食卓の奉仕」といっても、「食事係」ということではありません。もっと幅の広いものです。また、このふたつの奉仕は、どちらか一つがあればいいというものではありません。「御言葉の奉仕」は「食卓の奉仕」によって支えられ、「食卓の奉仕」は「御言葉の奉仕」があってはじめて正しい方向を持つことができるからです。使徒たちが言いたかったのは、「食卓の奉仕」が不必要だということではなく、使徒たちが「食卓の奉仕」に関わることによって「御言葉の奉仕」がおろそかになってはいけないということでした。

では、使徒たちはどのような解決策を示したのでしょうか。それは、七人の人たちを選び、その人たちに「食卓の奉仕」を任せるということでした。教会はのちに

「執事」と呼ばれる奉仕を持つようになりますが、この七人の奉仕者たちはその原型でした。「やもめたちへの配給」から生じたトラブルは「人」から生じた問題でした。使徒たちは、それを解決するのも「人」によってだということを知っていたのです。

私たちが抱える問題の多くは、人間関係から来ます。私たちは、人から理解されなかったり、冷たくされたり、裏切られたり、失望させられたりして、「もう、人間関係など持つまい」と思ったりするのですが、人の温かさや誠実さに触れると、もういちど人を信じてみようという気持ちになるものです。欠点や弱さがあっても、熱心に神を求める人々との交わりによって、「人間関係」の素晴らしさを味わうこともあります。私たちは「人」や「人間関係」によって傷つきますが、そんな傷ついた心を癒やしてくれるのも、「人」であり、「人間関係」なのです。「人」が問題を起こしますが、「人」が問題を解決します。「人」が問題を解決する鍵です。神が、問題解決のために与えてくださった方法は、制度や組織を変えることではなく、正しい場所に正しい人を配置することでした。

では、どんな人たちが問題解決のために用いられるのでしょうか。使徒たちが、七人を選ぶときに出した条件は、「御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち」（3節）でした。このことは、「食卓の奉仕」が「御言葉の奉仕」に劣るものではないことを教えています。管理的、福祉的な仕事だから、実務能力のある人を選べば良いというのでなく、その人たちに求められるのは、まず

第一に「聖霊」に満たされていることでした。人は、聖霊に満たされる前に、聖霊によって生まれ変わっていないければなりませんから、この条件にかなう人はボーン・アゲインのクリスチャンであり、聖霊を受け、聖霊の導きに従う人ということになります。

一般の仕事では、人に「何が出来るか」が問われ、その能力が優先されますが、神のための働きでは、その人が「どのような人であるか」が問われ、霊的・信仰的なものが求められるのです。ほんとうに霊的・信仰的な人は、たとえ実際的な能力で足りないところがあっても、すぐにそれを埋め合わせることができます。奉仕に就くとき、「私にできるでしょうか」と言っていて心配していた人たちが、その奉仕に励むうちに成長した例を、私は数多く見てきました。

次に「知恵」に満たされていることですが、この「知恵」は信仰の知恵のことです。テモテ第一 3:8-9には「同じように執事たちも、品位があり、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利を求めず、きよい良心をもって、信仰の奥義を保っている人でなければなりません」とあります。「食卓の奉仕」だから実際的なことができさえすれば、それでよいというのではありません。神への奉仕は、どの分野であれ、信仰によってなされなければなりません。それで「信仰の奥義を保っている」ことが求められるのです。

さらに、「評判の良い人」という条件も加えられています。「評判の良い人」といっても「人気がある」ということではありません。この七人は「人気投票」で選ば

れたわけではありません。ここでいう「評判」は、その信仰が実際の生活に表れ、他の人々も認めるものになっているということです。テモテ第一 3:7には、教会の指導者について、「また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません」とありますから、これは、社会的にも非難されることがないということでしょう。

「やもめたちへの配給」の問題は、こうして、聖霊と知恵とに満たされた人々によって解決されていきました。教会の問題の本当の解決は、どんなことであれ、聖霊によるのであり、そして聖霊は、聖霊に従う人を用いられるのです。

三、結果

この問題が解決した結果、何が起こったのでしょうか。7節にこうあります。「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。」教会内の問題が解決したとき、伝道が進み、人々が救われていったのです。

使徒の働きには、使徒 6:7 を含めて、「こうして神のことばは…」とか「こうして教会は…」と書かれているところが5箇所あります。「こうして教会は、ユダヤ、ガラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」（使徒 9:31）「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。」（使徒 13:49）「こうして諸教会は、その信仰を強めら

れ、日ごとに人数を増して行った。」（使徒 16:5）

「こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」（使徒 19:20）とても、励まされる言葉です。福音が広がり、人々が救われることは、神のみこころです。私たちの願いです。こうした福音の広がりや教会の成長は歴史の中で何度もありました。私たちは、聖書にあるとおりのことが、今、この時代にも起こることを願い求めて励んでいます。しかし、近年、このアメリカでも信仰、礼拝、伝道の自由がチャレンジを受けていますし、かつて世界の各地で燃えたりバイブルの火がどこでも消えかかっています。とくに、このパンデミックのために、教会が足踏みしているばかりか、後退しているように感じます。

しかし、今、ここで気落ちしてしまっただけではいけないと思います。さきほどあげた箇所はどれも、教会が迫害や困難、問題を乗り越えた結果、教会が前進したと言っています。私たちも、教会や個人が抱えている問題や課題に直面して、そこでストップしてはいけません、それを乗り越え、前進しなければならないと思います。そのためには、問題を問題として認めることから始めたいと思います。教会で何かのトラブルがあったとき、「教会といっても、人間の集まりだから、問題があつて当たり前ですよ」などといった言葉を耳にすることがあります。確かに、地上に完全な教会はありません。しかし、「教会といっても…」ということによって、神が教会にお与えになったスタンダードを社会一般のものと同じに引き下げることになりはしないでしょうか。そんなこと

をしたら、教会の中で正しくないことが起こっても、あたりまえのこととして認められてしまいます。そうなれば、教会は教会でなくなってしまう。聖書は、教会の中にあつた問題を包み隠さず語っていますが、それを容認していません。また、問題があるからといって教会を否定していません。教会が、また個人が、問題を問題として認め、それに取り組み、それを乗り越えるようにと励ましています。そして、それを乗り越えたときの祝福を約束しています。

「こうして教会は、…全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けた…」このような祝福が、教会に、また、私たちひとりびとりに与えられるよう、なお祈り合ってください。

(祈り)

イエス・キリストの父なる神さま、教会はあなたから特別な守りを与えられてはいますが、それでも、さまざまの問題を抱え、困難に直面し、誘惑に揺さぶられます。しかし、それを乗り越えたところに前進があり、成長があり、祝福があります。どうぞ、私たちに、問題に取り組む誠実さを与えてください。「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。」(詩篇 126:5) この御言葉の成就を、私たちに見させてください。イエスのお名前です。

導く人がなければ

使徒 8:26-31

8:26 ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」（このガザは今、荒れ果てている。）

8:27 そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピヤ人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピヤ人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、

8:28 いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

8:29 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。

8:30 そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。

8:31 すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。

一、導かれる人

私をはじめてアメリカに来たときの事です。到着して数日しか経っていない、はじめての日曜日、教会からの帰り、借りていた家の近くまで来ているのに、自分の家が分からなくなっていました。地図は持っていたのですが、地図を見てもよく分からなかったのです。ガス・ステーションで、ガスを入れていた人に、地図を見せて訊きました。「私の家はどこでしょう」とは言えなかったのです。「ここに行くにはどうしたらいいでしょう」と尋ねました。その人は、「こう行って、ああ行っ

て」と教えてくれましたが、それでも、私が見つからないような顔をしていたので、「ぼくが、そこへ行ってあげるから、あとをつけてきなさい」と言ってくれました。私は、その人の車のあとをつけて、無事に家に着くことができました。GPSのある今では、笑い話ですが、地図があっても、地図の読み方が分からないと目的地に着けないということがあるのです。

それは、聖書についても同じだと思います。聖書は、神が全人類に与えてくださった真理を示す地図です。聖書に従えば、誰もが天国への道を見つけることができます。しかし、聖書という地図があっても、その読み方が分からなければ、その道を見つけることができません。実際のところ、多くの人が聖書を読んでいながら、聖書から真理を、神への道を見つけられないでいます。それは、聖書に問題があるからではなく、私たちの側に問題があるからです。それは、私たちの理解力が足りないというよりは、私たちの心の態度の問題です。

イエスの時代の律法学者やパリサイ人たちは聖書の専門家でした。しかも、最高の教師であるイエスから聖書を解き明かしてもらったにもかかわらず、真理を知ることができませんでした。その人たちは、自分たちは聖書を知っている、誰からも学ぶ必要がないという高慢で「固い心」を持っていたからです。「誰からも学ばなくてもよい」ほど賢い人は誰もいません。誰からも学ぼうとしない人はほんとうはいちばん愚かな人かもしれません。

イエスから直接導きを受けた弟子たちも、「鈍い心」

を持っていました。イエスは、復活ののち、エマオへの道で、ふたりの弟子に現われました。このふたりは復活の知らせを聞いていたのにそれを信じなかったのです。イエスはこのふたりに、「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか」（ルカ 24:25-26）と言っています。ふたりはやがて心の「目が開かれ」、自分たちに語りかけておられたのが、復活されたイエスであることを知りました。ふたりは、エルサレムからエマオに着いたばかりなのに、もういちどエルサレムに引き返して、他の弟子たちにイエスに出会ったことを知らせました。イエスはエルサレムにいた弟子たちすべてに現われ、「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて」くださいました（ルカ 24:44-48）。心が閉じられたままだと、聖書が分からないのです。聖書が分かるためには、まず、第一に、私たちの心が開かれる必要があるのです。

きょうの箇所のエチオピアの役人は、そうした意味では開かれた心を持っていました。この人はユダヤ人ではありませんでしたが、まことの神を信じる人で、礼拝をささげるために神殿にやってきただけでなく、当時は高価な聖書を買って求め、それを読んでいました。まことの神を畏れる真っ直ぐな心、真理を知りたいという熱心な願いを持った人でした。そればかりでなく、この人は謙遜でした。ピリポは、この人に「あなたは、読んでいる

ことが、わかりますか」と尋ねましたが、皆さんだったら、そう言われたらどう思いますか。「なんて失礼な。私は教育のある人間で、少しは分かりますよ。分かりもしないのに読んでいるわけではありませんよ」と言い返したくなるかもしれません。しかし、このエチオピアの役人は、自分がすべてを理解していないことを知っていました。そして、自分が分からないところを知りたいと願いました。それでピリポに「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と答え、ピリポを自分の馬車の隣の席に招き入れたのです。この人のように、自分には知らないことがあると認める人が本当に知恵ある人だと思えます。神の言葉の前に謙虚になって、聖書を知りたいと願う人は、誰でも、真理に導かれます。聖書が分かり、真理が見えるようになるのです。

二、導きのゴール

エチオピアの役人は、このとき、イザヤ書を読んでいました。53章まで読み進み、7節と8節を読んだばかりでした。そこにはこう書かれています。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」エチオピアの役人は、早速ピリポに質問しました。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えて

ください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」（34節）

イザヤ 53 章の「苦難のしもべ」が誰であるかは様々な論じられてきました。ある学者は、これは預言者イザヤ自身のことであると言い、別の学者はユダヤ民族だと言い、また別の学者はイスラエルのうちの敬虔な人々のことだとも言っています。しかし、「苦難のしもべ」が誰であるかについては、すでに正解が出ています。35 節に「ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた」とあるように、イザヤ 53 章の「苦難のしもべ」は、イエス・キリストです。使徒ペテロも、その手紙にイザヤ 53:5-7 を引用して、こう言っています。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（ペテロ第一 2:22-25）「苦難のしもべ」はまぎれもなくイエス・キリストです。キリストの苦難、十字架の苦しみは、聖書にある通り、私たちの救いのためでした。私たちはそのことを信じて救われ、また、いやされたのです。

35 節に「ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた」とあるのは、聖書を教え

る人にも、学ぶ人にもとても大切な言葉です。聖書は歴史書として、文学として、また、思想、哲学、宗教の書物としてじつに、豊かな内容を持っています。聖書はあらゆる分野に通じます。それで、聖書を学び始めると、さまざまな分野に興味が広がります。聖書を広く学ぶことは悪いことではありませんが、そのことによって本来の目的からそれてしまうことがないように、注意しなければなりません。聖書の学びの本来の目的とは何でしょうか。ヨハネ 20:31 に「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」とあるように、それは、聖書の中にイエス・キリストを見出し、イエス・キリストを信じて救われることです。また、テモテ第二 3:16-17 にはこうあります。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」聖書は、救われた者が、成長し、神の働きにふさわしいものとなるためにあります。聖書を学ぶ者も、教える者も、そのゴールがイエス・キリストにあることを忘れてはなりません。

エチオピアの役人は、すでにまことの神に立ち帰っていましたが、ピリポとともに聖書を学ぶうちに、神のひとり子イエス・キリストを信じる信仰に導かれていきました。馬車が進んでいくうちに水のある所に来ました。

すると、エチオピアの役人は「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるのでしょうか」（36節）と言って、自ら進んでバプテスマを願いました。エチオピアの役人は聖書の学びから始まって、イエス・キリストへの信仰を告白するバプテスマへと導かれました。これが、正しい聖書の読み方、学び方です。キリストを信じ、救われ、キリストに結ばれるのでなければ、どんなに聖書を学んでも、それは単なる「勉強」で終わってしまい、本当には聖書を知ることにはならないのです。

三、導く人

このエチオピアの役人がその後どうなったかは、聖書に何も書かれていません。しかし、紀元一世紀にエチオピアに教会があったことは歴史によって知られています。やがてキリスト教はエチオピアの国教となりました。1974年にエチオピアで革命が起こるまで、歴代エチオピアの皇帝はキリスト教の擁護者でした。1974年といえば、1960年のローマ・オリンピックのマラソンで優勝したアベベが亡くなった翌年ですから、そんなに昔のことではありません。ピリポに導かれたこのエチオピアの役人は、古代から続いたエチオピア教会の礎を築き、エチオピアの王室に大きな影響を与えたと思われます。彼は、ピリポによって信仰に導かれました。しかし、それで終わらず、今度は、他の人をキリストに導く人になったのです。

神の言葉を学んだ者がそれを他の人に教え、信仰に導

かれた者が他の人を信仰に導く、そのようにして神の言葉は広まり、信仰が伝えられてきました。私は、そのことを日本でも、アメリカでも体験してきました。日本ではキリストに導かれた一人ひとりが、家族や友人を導く人となり、多くの人が、イエス・キリストを信じ、救われて行きました。アメリカでは、先輩のクリスチャンが教会に来た若い人たちの世話をし、その人たちが信仰を持ちたい、バプテスマを受けたいと言うと、私のところに連れてきました。私は、そうした人たちを信仰の告白とバプテスマに導きました。先にキリストに導かれた人が他の人をキリストに導く人になりました。もちろん、みんなが家庭集会を開いたり、そこでバイブル・スタデーをリードしたわけではありません。それぞれに奉仕の分野は違い、働きの賜物も違いました。しかし、誰もが、何かの形で他の人を導く奉仕に加わりました。神は私たちに、「導く人になりなさい」語りかけてくださっています。

しかし、「導く人になりなさい」と言われても、「自分にできるのだろうか」と心配になります。ヘンリ・ナウエンは、そんな私たちの気持ちを代弁して次のように言っています。

愛する主よ、あなたの使徒ピリポは、エルサレムから帰国途中のエチオピア人巡礼者の旅に加わりました。エマオへ向かう者たちにあなたが加わったように、ピリポはその旅人に御言葉を説明し、それがあなたについて語っていることを明らかにしました。どうか私の奉仕が、そのようなものでありますように。人々の人生の旅路に加わり、あなたを見る目を開かせるもので

ありますように。多くの方が探し求めています。そのために学び、読み、議論し、書き、実行し、心の最も奥深くにある問いの答えを見つけようとしています。でも大勢の人が暗中模索のままです。私が彼らに加わり、そしてピリポがしたように、「読んでいることがお分かりになりますか」と尋ねる勇気をください。道であり、真理であり、命であるあなたについて語る英知と確信をお与えください。そして、水と聖霊によるバプテスマを受ける用意が彼らの内にあるかを見分ける識別力をお与えください。しかし主よ、あなたがピリポに「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と語られた励ましを、どうか私にもお与えください。ご存じのように、私は内気で臆病です。自信と余裕をお与えください。アーメン。

ヘンリ・ナウエンでさえ、「私は内気で臆病です。自信と余裕をお与えください」と祈っています。私たちはなおのことです。しかし、イエスは、自分の弱さ、足らなさを知る者にこそ、共にいて、助けてくださるのです。主の前に正直に出て、「主よ。小さな器ですが、お使いください」と祈りましょう。

(祈り)

父なる神さま、私たちに「導く人」を与え、イエス・キリストを信じる信仰へと導いてくださったことを感謝いたします。私たちは、まだ天の御国への旅の途中にあります。どうぞ、私たちになおも導きを与えてください。また、私たちを、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」との声に答えることができる、他の人にとっての良い導き手としてください。イエス・キリストのお名前です。

目からうろこ 使徒 9:10～19a

9:10 さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ。」と言われたので、「主よ。ここにおります。」と答えた。

9:11 すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。

9:12 彼は、アナニヤという者がはいて来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、幻で見たのです。」

9:13 しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。

9:14 彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」

9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。

9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

9:17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家にはいり、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中でお現われになった主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

9:18 するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、

9:19 食事をして元気づいた。

「鵜の目鷹の目」「目の中に入れても痛くない」「生き馬の目を抜く」「壁に耳あり障子に目あり」「夜目遠目笠の内」「目の上の瘤」「目は口ほどに物を言う」な

ど、日本のことわざには「目」に関係のあるものがいくつもあります。「白い目で見る」「目くじらを立てる」「目を三角にする」「目を丸くする」「目から鼻に抜ける」などという言い回しもあって、数えればきりがありません。その中に、聖書から出たものがあるのですが、ご存知ですか。「目には目を歯には歯を」もそうですが、「目からうろこ」は、きょうの箇所から来たことわざです。「目からうろこ」はよく使われるのですが、これが聖書から来ていることを知らない人がほとんどです。このことわざを使うとき、それが聖書から来ていることを話してみてください。イエス・キリストのことを話すきっかけになると思います。他にも、身近なところで聖書の言葉が使われています。『目からうろこ』という小さな本に、そうしたもののいくつかを紹介していますので、よかったら、お使いください。

「目からうろこ」ということわざには、今まで見えなかったもの、理解していなかったことが突然のようにして見え、分かるようになるという意味があります。サウロはその体験をしたのですが、彼はいったい、何が見えるようになり、分かるようになったのでしょうか。

一、自分が盲目であること

サウロが分かった第一のことは、「自分が盲目であった」ということでした。サウロは、実際に目が見えなくなって、自分がイエス・キリストについて何も分かっていなかった、真理に対して盲目であったことを知りました。サウロはイエスと同時代の人で、イエスが宣教し、

十字架にかけられ、復活された時、エルサレムにいて、高名な学者ガマリエルのもとで学んでいました。サウロは、多くの人がイエスの話を聞き、奇蹟を目撃し、イエスのことを話題にしていたのに、そうしたことには目もくれず、律法の研究に没頭していました。しかし、ステパノの殉教をきっかけにして、サウロは教会を迫害しはじめました。

ステパノは、使徒6章で、「食卓の奉仕」のために選ばれた「七人」のひとりでした。ステパノは大祭司の命令によって町の外に連れ出され、石で撃たれ、教会の最初の殉教者となりました。使徒7:58に「証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた」とあります。この「証人」とは、ステパノについて偽りの証言をした人たちです。この人たちがステパノを石で打ったのですが、サウロは彼らの上着を預かりました。「上着を預かる」ことには、上着を預けた人々のすることについて責任を負うことを意味しました。サウロは、ステパノに直接手をくudしませんでしたが、ステパノを死に追いやったひとりだったのです。使徒8:1にも「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた」という言葉が繰り返されています。

この時からサウロは「教会を荒らし、家々にはいつて、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れ」（使徒8:3）るといふ乱暴なことをするようになりました。エルサレムの教会だけでなく、遠くダマスコの教会にも迫害の手を伸ばしました（使徒9:1-2）。なぜ、サウロは、そ

んなにも教会を迫害したのでしょうか。それは、彼の靈的な目が閉ざされていて、イエス・キリストを見ることができなかつたためでした。それでいて、サウロは、自分の知識に依り頼み、自分は「見えている」と思い込んでいました。しかし、ダマスコに向かう道でイエス・キリストに出会い、目が見えなくなつて、はじめて、自分が靈的に盲目であることに気付きました。そしてそれに気付いたことが、彼の救いの第一歩となりました。

ヨハネ9章で、イエスは盲人の目を開かれた時こう言われました。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」「見える者が盲目となる」というのは、イエスが示された真理を受け入れないでいると、真理を知りたいと思つても、それを知ることができなくなるという意味です。この言葉を聞いたパリサイ人たちは、イエスに言いました。「私たちも盲目なのですか。」イエスはそれに答えて言いました。「もしあなたがたが盲目であつたなら、あなたがたに罪はなかつたでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」(ヨハネ9:39-41)ほんとうは真理が見えていないのに「見える」と主張するところに罪があります。自分が真理に対して盲目であることを認め、「私の目を開いてください」と願う時、それが「目からうろこ」の時となるのです。

二、イエスが神であること

サウロが分かった第二のことは、「イエスが神である」ことでした。サウロが教会を迫害したのは、イエスを信じる者たちがイエスを神として信じ、礼拝していることに我慢ができなかったからでした。ユダヤ教の教師のことを「ラビ」と呼びますが、イエスは「ラビ」のひとりに過ぎない。神を教える者を神として礼拝することは、おひとりの神への冒瀆であり、恐ろしい偶像礼拝であると、サウロは考えたのです。このような異端は、滅ぼしてしまわなければ、ユダヤ教そのものが壊れてしまう。サウロはそんな危機感に駆られて行動したのでしょう。

しかし、ダマスコへの道で、イエス・キリストに出会った時、サウロが信じていた前提のすべてがくずれ去りました。使徒9:3に「ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした」とあります。この「天からの光」というのは、神の栄光の表れのことです。モーセはシナイ山で神の栄光を見、イザヤもそれを見えています（出エジプト33:18-2、イザヤ6:1-4）。サウロは聖書の専門家でしたから、自分を取り囲んだ光が神の栄光であることをすぐに理解したことでしょう。ところが、その光の中から聞こえた声は「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」というものでした。サウロが「主よ。あなたはどなたですか」と尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」という答が返ってきました（使徒9:4-5）。

聖書によれば、神の栄光は、神ご自身でした。神が

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と言われたのです。それはイエスが神であることを意味しています。サウロは、イエスを神とすることは、おひとりの神の栄光を傷つけることだと信じ、教会を迫害していたのに、その神が、「わたしはイエス。教会は、わたしのからだ。教会を迫害することは、わたしを迫害することである」と言われたのです。これはサウロのそれまでの信念を突き崩すものでした。その後三日の間、サウロは目が見えないまま、食べることも飲むこともできませんでした。おそらく、眠ることもできなかつたでしょう。神の栄光に撃たれたばかりでなく、その神の栄光がイエスであったという大きな衝撃を整理するのは大変なことでした。サウロはその意味を考え続け、また、それが分かるようにと祈り続けました。そして、到達した結論は、「イエスは神である。父のひとり子なる神である」ということだったのです。

サウロ、のちのパウロは、「『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです」（コリント第二 4:6）、「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました」（エペソ 5:8）とその手紙に書いています。イエスを信じた者はみな、神の光によってその心を照らされ、イエスが神であり、キリストであることを知りました。パウロのこれらの言葉は、サウロと呼ばれていた時の体験からのものでした。

三、自分の使命

サウロが分かった第三のことは「自分の使命」でした。それまでのサウロは教会を迫害し、ユダヤ教の伝統を守ることが「自分の使命」であると感じていました。しかし、無抵抗な人々を、男も女もかまわず捕まえて牢獄にぶち込むことに、どんな満足や喜びがあるのでしょうか。サウロは、無意識のうちに、自分のしていることが、自分の使命ではないことを感じていただろうと思います。しかし、彼には、自分がこれからどうすべきなのかが全く分かりませんでした。

そのサウロを導いたのは、ダマスコの教会の、おそらく、牧師の働きをしていたアナニヤという人でした。アナニヤは、サウロが自分たちを捕まえるために来たことを知っていたので、サウロのところに行くのをためらいましたが、イエスはアナニヤにこう言われました。

「行きなさい。あの人是我の名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」（15節）イエスはサウロの人生に計画を持っておられ、ご自分の使命を果たさせるために、サウロに現われてくださったことが、この言葉から分かります。

アナニヤが手を置いて祈ると、サウロの目からうろこが落ち、サウロは再び見えるようになりました。そして、サウロはその場でバプテスマを受け、罪びとから神の子へと変えられたばかりでなく、イエスと教会を迫害する者から、イエスを宣べ伝え、教会を建てあげる者へと変えられました。サウロはバプテスマによって、救い

とともに彼の新しい使命を受け取ったのです。

すべての人がサウロと同じ体験をして救われるわけではありませんが、霊的には、神が分かり、イエス・キリストが分かり、その結果、自分の生き方が変えられるという体験はサウロと共通していることでしょう。私たちは「自分のことは自分が一番よく知っている」と言います。しかし、人は、神を知るまでは、ほんとうの意味では自分のことが分かっていないのです。自分が何のために生きるのかという確かな使命を持っていないのです。

「使命」は「命を使う」と書きますが、何のために自分の命を使うのかは、イエス・キリストを知ってはじめて分かるものなのです。

神から人生の意味と目的を教えられ、それに向かって生きる使命を与えられたのが、私たちのバプテスマの時でした。悔い改めて神とイエス・キリストを信じバプテスマを受けた者は、新しく生れ、神の子どもとなったばかりでなく、その時に神の栄光のために生きるという使命を授かり、その使命を果たすための力と導きである聖霊をも受けたのです。

目が開かれたサウロは、今度は人々の「目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ」るために遣わされました（使徒 26:16-18）。私たち皆がサウロのように宣教者になるわけではありません。しかし、ペテロ第一 2:9 に「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚

くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」とあるように、やみから光に移された私たちには、その恵みを証しする使命が与えられています。

イエス・キリストは私たちの心を照らし、私たちの心の闇を追い払ってくださいました。そして、闇であった私たちを光とし、この暗い時代を照らす光としてくださいました。私が日本で聞いていたキリスト教のラジオ番組では、「暗いと不平を言うよりも、すすんで灯りをつけましょう」という言葉が、いつも番組の最初に流れていました。イエス・キリストこそまことの光、私たちが届ける光はイエス・キリストです。希望を失い、平安を失くしている人々にまことの光であるイエス・キリストを見せる者になりたいと思います。それぞれに与えられた場所で、与えられた賜物を生かして、人々に光を届ける「使命」を果たす者になりたいと思います。

(祈り)

主イエスさま、あなたは、サウロの目からうろこを取り除き、あなたの栄光と彼の使命をお知らせになりました。同じように、私たちの心にある偏見、疑い、恐れ、思い煩いなどのうろこを取り除き、あなたの栄光を見る信仰の目をお与えください。私たちひとりびとりを、まことの光であるあなたを証しする小さな光としてください。御名により祈ります。

日本人が唯一の神を信じようとしなないのは、多神教である神道の影響が大きいと思われまゝす。日本人の多くは宗教を行事や儀式に参加することと考へており、自分が何を信じているのかを深く追求しませぬ。また、信仰と生き方がかならずしもつながってはいませぬ。神社での参拝や寺院での勤行、神棚や仏壇に手を合わせるこゝが家内安全、無病息災、商売繁盛といったご利益に結びついてはいても、それが人生の意味や目的を導くものとは考へてはいませぬ。

しかし、宗教行事は、それが何百年と繰り返され、伝統となると、人を支配する力となりまゝす。仏教が先祖を含めた家族のつながりを定め、神道が地域社会での人間関係を作るのです。「自分は特定の宗教を持っていない」と思ってはいても、人々は、神道と仏教の両方の枠の中で生活していまゝす。多くの人々は、無意識のうちに神道と仏教を心の支えとし、生活の規範としており、それに満足していまゝす。

ですから、近代になつて日本に伝えられた「キリスト教」が、神道や仏教のように土着化しようとしても無理なこゝです。なるほど日本人もクリスマスをお祝い、結婚式を教会で挙げはしまゝす。しかし、日本人がお祝うクリスマスはキリストなしの商業的なものであり、結婚式も男女の誓約の交換であつて、神に対する誓約ではありませぬ。神もキリストもない「キリスト教」を広めたとしても、それは神道と仏教の隙間を埋めるだけで終わつてしまいまゝす。人々に必要なのは、神道や仏教を超えた福音そのものであり、福音だけが提供できるキリストによる救いなのです。



Penguin Club

www.penguinclub.net